

第 6 回「京都御苑ずきの御近所さん」

宗教学者

山折 哲雄 様



■岩手県花巻市の御出身と伺っています。京都に移り住むことになったきっかけと、現在も京都に住まわれている理由などをお聞かせください。

京都に住んで今年で 28 年目です。実はそれ以前から、ずっと梅原猛さんに「今度京都に面白い研究所をつくるから、来てくれよ」と言われていたんです。私が東北大学の助教授に就任して 2 年目ぐらいの時に、仙台でシンポジウムがありました。梅原さんや桑原武夫さん、東北大学の源了圓さん、高橋富雄さんが参加されていました。私はそれ以前からみなさんのことを知っていて、私も末席に並ばせて頂きました。シンポジウムの後に懇親会があって、久しぶりに梅原さんと隣り合っ酒を飲んだ時に、酒を飲みながらその話をされました。「京都に面白い研究所をつくるから、こっちに来い」って。私は母校に行ったばかりでしたが、その話があまりに面白かった。梅原さんのあの口調で、酒が入っているので面白くない訳がないんです。それで、私もつい「行きましよう」って酔っぱらって言ってしまった。せっかく母校に行ったんですが、仙台はそんなに面白くななくなりました。

その後、千葉の国立歴史民俗博物館に 6 年間おりました。大阪の国立民族学博物館と並んで、西の民博、東の歴博と言われたものです。民博は世界の文化、歴博は日本国内の歴史を扱っていました。梅原さんはすぐ研究所ができるようなことをおっしゃっていたんですが、設立作業はなかなか進まない訳ですよ。文部省の中央官僚と戦って、漸く準備室ができました。それが日文研（国際日本文化研究センター）です。

早速その第 1 弾の研究者として京都に来たのが 28 年前のことでした。その頃はまだ研究所の本体ができていなかったもので、西京区の竹の里、洛西ニュータウンの前に仮の事務所をつくって、大部屋で 10 人ぐらいが仕事をしていました。日文研は全国から一匹狼だけを集めてつくったようなところで、その頃が一番面白かったですね。みんな勝手放題なこと言って、毎日自分のやりたいことをやっていたらよかったです。初めて経験した面白い世界でした。そこからずるずるずると 10 年間、65 歳の定年まで勤めました。そういう御縁で私は京都に来たんです。

定年まで勤めて、終わったらもう東京に帰るつもりだったんですよ。千葉の浦安にまだ家らしきものがあって、けれど、京都にいる間に東京が異常に発展してしまっ。「とても人が住むところではない」とだんだん思うようになったんです。逆に京都が好きになっていて。文化や宗教に関しては、やっぱり京都は奥が深い。特に私は宗教を研究してきましたから。また梅原さんがよいことを言うんです。「宗教を研究してきたんだから、宗教をやるなら京都に来て、最後の上がりの

研究をしないとあまり意味がないよ」と。そういう殺し文句があって、「言われてみたらその通りだ」と思って、定年を迎えた時にはもう東京に帰る気がなくなってしまいました。

定年で退職した後は、樋口さんから「滋賀県立大学へ来てくれ」と言われていたので、行くつもりだったんですよ。ところが、2代目の日文研所長だった河合隼雄さんに、「奈良に女子の短期大学（現：白鳳女子短期大学）をつくる話があるんで、面倒みてくれないか。そこに行って学長やってくれよ」と言われて。「河合さんに言われたら仕方ないな」と。「東京に帰るつもりはないから、久しぶりに女子大生と一緒に生活するか」と思い、それで奈良に出ることになりました。

準備室時代の最初の1年は京都から通っていましたが、やはり学長に就任してからは通うとなると大変で、授業が始まってからの2年間は奈良市内に住みました。2年間の授業を終えてからも実は「もう少し居てくれ」とは言われたんですが、当時、京都造形芸術大学の理事長だった徳山詳直さんに「これから大学院にドクターコースをつくるから、その大学院長をやってくれ」と口説かれてそちらに行くことにしました。

実はその時も梅原さんに「造形芸術大学に2年間ぐらい行きたい」と相談したんですよ。ところが、大学院長に就任すると同時に、「日文研の後任をやらないか」という話が来たんです。さすがにこれは参りましたね。ちょうど後1年の余裕があったので、1年間だけは造形大学に行くことにして、徳山さんはそれをOKしてくれていたんです。「その後は場合によっては出るよ」という話で。

当時は、梅原さんが造形大の最高顧問になられていたので、梅原・徳山お二人の間で話し合っ通じていると私は思っていたのですが、1年経って、僕が日文研へ移って河合さんの跡を継ぐことになった時に、徳山さんが反対し始めて大騒ぎになりました。だけど約束でしたし、河合さんがどうしてもとおっしゃるから仕方なかった。それで、日文研へ所長として行きました。だから造形芸術大学にいたのは1年だけでした。その後、所長を退任してからもいろいろお話は頂きましたが、「本当にもう宮仕えはたくさん」と思っていたので、それ以来一切どこにも行かずに老人フリーターになりました。

最後に教師をやったのは京都造形芸大でしたが、その頃は生徒たちの私語が多かった。全国どこでも「私語で講義にならない」と教師たちがみんな嘆いていました。ところが、私語時代が終わると今度は携帯時代になって、シーンとはしているんだけど、全然話を聞いていない。どうにもこうにも講義にならない訳です。100人～150人も入る大教室で、私たち年寄りも、哲学や宗教といった大きいテーマで喋らされる訳です。そんなのは誰も聞いてないんです。やっぱりそれで「もう教師辞めるか」と辞めていった人もたくさんいました。

私はそれだと癪だから、実験をしようと思ひまして。まず、学生たちに「筆記用具は全部しまえ」と言う。これがなかなかしまわないんです。子どもの頃から躰られているから、まあ、5分か10分かかって全部しまう。その次は「姿勢が悪い。姿勢を正せ」。これがまたなかなかできなくて10分くらいかかる。何とか文句を言いながら、みんな姿勢を正したら、次は「呼吸、深呼吸」。そこまでやって静かになるのに30分くらいかかります。さすがに姿勢を正して呼吸を整えると静かになるんです。

そこで、「目をつぶれ」というと、薄目を開けて左右を窺っていたりして、なかなかできないんですが、きちんと目をつむった時に、「今、諸君は初めてものを考える基本的な姿勢になっているんだ」と言うんです。そこでデカルトのあの一行、「我考える故に我あり」を持ち出して、哲学の授業はこれで終わりでもいいんです。ここままでほぼ40分。あとは必要なくて、教師はみんな時間稼ぎでいろんな知識を切ってはちぎって、ちぎっては切っつけて教えている。「大学の授業は40分くらいでいいんじゃないですか」と文部省にも言いましたが、誰も聞いてくれませんでした。そういう時代でした。

■山折先生の思い出の中で、京都御苑にまつわるものはありますか？また、京都御苑で好きな場所、好きな時期などありますか？

毎年祇園祭が始まると、住んでいる場所も近いので御所が思い浮かびますね。普段、御所は散歩コースです。家から御所まではちょっと距離があって、私の足で歩いて 50 分くらい、下手をする と 1 時間かかってしまう。でも、それくらい歩かないと駄目だと思いますね。だんだん歳をとるにつれて厳しくなってきた、最近では御所の手前で戻ってくる人が多いですが、夏になると御所の光景が浮かび上がってきます。冬の御所じゃなくて、真夏の御所のあの蝉時雨です。

昨年のことですが、朝 5 時に起きて御所へ散歩に行ったんです。四条通から室町通をずーっと上がっていくと女学院大学があって、右に曲がると、御所の西の正門の真ん前に出る。そのコースで一人御所まで行きました。5 時に家を出発して、着いたら 5 時 50 分。真夏の昼間の御所は蝉時雨がすごいんですが、それがシーンと静まり返っていて驚きました。「最近、なんか異変でも起こったのか」と。中に入ってブラブラしていると、散歩をする人が 2 ~ 3 人いるくらいで、あとは人っ子一人いませんでした。その時、蝉がいつせいに鳴き始めたんです。時計を見たら 6 時。それで「御所の蝉のお目覚めは朝の 6 時か」と書いたんです。

暫く経ってから、京都新聞に御所の蝉についての記事が出ました。御所の蝉はクマゼミで、6 年間地中に眠っているそうです。鴨川沿いの女子高校生たちが蝉の抜け殻を集めて毎年数を調査をしていて、最近では数が半減していることが記事に書かれていました。それから、世界で地中に眠っている期間の長い蝉がたくさんいるということを知ったんです。一番長い種は北米に生息する種で 17 年。蝉が地中に眠っている周期が奇数だということで、奇数ゼミという学名があるそうです。以前、養老孟司さんに会った時に「奇数ゼミという蝉がいるよ」って話をしたら、彼がまたそういうことを詳しく教えてくれました。とにかく虫のことを喋りだすと止まらないんです。

そういうこともあって「ああ、蝉ってのは偉いな」と思いました。何年も地中で眠っていて、出てきて 1 週間かそこらで死んでいくでしょう。最後の一回限りの声で鳴いている訳ですよ。

6 年ほど前に、戦後を代表する現代歌人の一人、河野裕子さんが亡くなりました。御主人が京大の生物学の教授だった永田和宏さんで、私は御夫妻に生前一度だけお会いしたことがあります。今年になって、岩波書店から河野裕子さんの精選された歌集が『あなた』というタイトルで出版されたんです。それを私にも送って下さいました。河野さんは生涯 17 冊の歌集を出していて、その 17 歌集全体がわかるように、選び抜かれた歌が 1 冊に編集されていました。

その最後、死を前にしてつくられた歌を集めた歌集が『蝉声』、蝉の声というタイトルなんですよ。それがなんとも不思議なことで、河野裕子さん、あるいは河野さん御夫妻もずっと御所の蝉の声を聞いていたに違いないと勝手に思っているのですが、その蝉の声のように泣いて、あの人は亡くなった。そういう思い出が御所の蝉の声を通していろいろ思い出されてきます。

今回のように不思議とそれに関連した事件、事柄が起こる。そういったことがあって以来、御所は私にとって只事でない存在になりつつあります。

私の『法然と親鸞』という本の中でも御所について書いています。御所は最澄の比叡山と空海の東寺とのちょうど中間にあって、両方から睨みをきかされているように思いますね。その間に東本願寺と西本願寺があり、南北の軸線上も東西の軸線上もここが中点にあたる。御所は基本里内裏ですが、その里内裏が本当に機能していたんですね。それと、二条城との関係もあります。その全体像がわかるのは京都タワーだと私は言っています。京都タワーの展望台に上ると、そういった構図が眼下に広がる。京都タワーほど京都の人々に人気のないところはないんですけど、今はもうすっかり馴染んでいますね。京都タワーは東寺の五重塔と並んで京都に馴染んでいるし、それを見ながら私も京都に馴染んでいる。だから、その点では京都タワーと私は同一化しているんです。同時に御所とも同一化していて、それが何とも気分がいいところですね。

散歩をする時はもちろん一人。自宅には妻がいるだけで、老夫婦ですから。かみさんを連れて散歩っていう、無粋なことはしないです。私の散歩コースの中心は、四条堀川とその同心円上ですね。歩いていると、いろんな面白い歴史上の遺跡・旧跡や由緒のあるところが出てきます。本能寺があって、壬生寺があって、親鸞や道元の入滅の場所がある。すぐ側は与謝蕪村が亡くなったところですし、本居宣長が勉強に来た場所もあります。京都はすごいところですよ。

京都の町は、いろんな古い時代を伺わせるような町並になっているんですね。例えば西洞院通は、地形が沈んで低くなっているでしょう。そこには昔、川があったんです。明治時代には電車が通っていたそうですね。私は実際には知りませんが、そこを歩いて行って、高辻通をちょっと西に入ったところに道元の入滅の場所が、さらに南に行くと、松原通をちょっと東に入ったところに親鸞の入滅場所がある。その道をとぼとぼ歩いて行くと、300年くらいさっと歴史を遡る訳です。年表を調べてみると二人とも同じ時代に京都で生活しているんですよ。

あの時代は実はそんなに人口が多くないから、どこを人が歩いているか見えるでしょう。絶対道元と親鸞は行き違っていると思うんです。八坂神社のすぐ側には法然や親鸞が出入りしていた吉水坊がありますし、道元は建仁寺に入っていますから、行き違っていても不思議じゃない。あながち、ただの嘘や妄想じゃないんです。歴史学者たちはみんな、文書の証拠がないとそのように歴史を見てくれませんがね。御所だってそうでしょう。どれだけの人が出入りしたのかわかりませんから。

もう一つ、御所がなかなか面白いなと思ったのは、周りをぐるりと一回りした時です。私は東京に行った時には皇居の内堀・外堀を歩いて回ることがあるんです。みんなジョギングしていますけど、皇居の周りには何にもないんです。お堀があって、縄文時代の森があって、あとは二つだけ銅像がある。一つは楠木正成。これは二重橋の近くにある。もう一つは和氣清麻呂。御所の正門の前にある護国神社の御祭神です。その銅像が大手門のところにある。皇居は一回りしても二重橋と大手門に二人の銅像があるだけなんです。一回りするのには、私の足で2時間くらいかかります。

御所も同じくらいですが、御所の場合には一回りすると神社やいろいろなお墓があります。それは多神教の世界なんですよ。東京は一極集中で、一神教の世界になってしまった。皇居は「中央の天皇を中心とする一神教だ」と私は言っています。御所、京都という場所は多神教で、その違いは大事なことだと思うんです。御所の周りを一回りする時は、どういう神様や御霊さんたちが祀られているのを見ながら、あるいは参拝しながら回るのがいいのではないのかと思います。京都の本質を知ることにつながると思うからです。東京は一神教という観念が非常に強くて、京都とは文化が違う。このことは今言わなきゃいけないと思っています。

京都の人が以前から言っていることですが、京都は天皇さんと庶民の間が地続きなんです。東京、皇居は地続きにはなっていません。だから同じような迎賓館にしても、京都の迎賓館は今度完全解放することになって、問題はあってもいいかもしれませんがよいことだと思っています。

今度、私は『「ひとり」の哲学』という本を出版しますが、これは私が30年以上取り組んでいる問題なのです。随分前から「ひとり」について言ってはきました。ずっと考え続けてきたことをできるだけわかりやすく、哲学という観点から自分なりにまとめてみました。いろんな人物が出てきますが、中心は親鸞、道元、日蓮、法然、一遍、この5人です。その人たちの「ひとり」を議論して、最後に「ひとり」という章でまとめています。「ひとり」は私の30年来のテーマなんです。上野千鶴子さんが出てきて、「おひとりさま」ということで全部お株をとられてしまいました。私の本は全然読まれないですが、上野さんの本はベストセラーになっていますね。「やっぱり上野さんは僕らと違う。『お』と『さま』を付けたから」って、冗談を言って笑っています。

■京都御苑の今後について、御意見など自由にお願ひします。

難しいですが、一番大事なことはやはり“森”を大事にすることだと思います。これは最優先されるべきことです。京都御苑の森をもっともっと鬱蒼たるものにするには植生的にはできないのでしょうか。

今年の正月に NHK が放映していた特集番組で、明治神宮の森を取り上げていました。そこで初めて知ったことがあるんですが、森林学や鳥類学、昆虫学といった、いろんな分野の専門家が明治神宮の森の生態を研究し続けているのです。漸くあの鳥が来るようになった、この虫が出てくるようになったと、いろんな新しい発見があると。森をほったらかしにしておくで「密林になる」と言っていました、専門家に言わせるとメリット・デメリットの両方があるそうですね。明治神宮の森は明治以降に 100 年で作ったものですが、御所の森は 100 年どころの話じゃないでしょう。その千年の歴史を浮かび上がらせるような森づくりが可能なのかということから始まるといういなと思うのです。

例えば、「道長時代の御所は荒地があった」とか、「肝試しのためにそこに行って帰ってくるといふゲームまで行われた」といふ話があるんです。妖怪が住んでいるようなところをつくっても面白いかもしれませんね。誰も入れないような空間があってもいいかもしれない。これからどんどん公開していく訳で、これは基本的にはよいことですが、禁足地をおつくりになるのかどうか、大変工夫がいるでしょうね。

天皇さんが生前退位されるのはまず間違いないでしょう。御所を活用するというのであれば、天皇さんが上皇になられておいでになった時に、京都全体をどう設計するか。その時に御所をどう考えるか。御所をどうするかによって、京都全体の都市設計を考える必要があると思います。

京都は今、みんな内向きになってしまっていると感じます。お花はお花、お茶はお茶、踊りは踊り、錚々たるメンバーや伝統はありますが、それぞれが内に閉じるというカタテ割りになってしまつて、交流するかの如き態度を見せても実際は閉鎖的になっています。そんなことでは京都は本来の力を発揮できない。これは何とか壊さないといけません。天皇さんがおいでになった時に京都全体をどう考えるかということ、日本全体をどう考えるかに関わる訳ですから、誰が音頭を取るにせよ、御所を中心にそういう構想を立てることが必要でしょうね。

御所水道を復活したいと発言される方もありますが、土岐さんの「堀川に川を通す」といふ構想の方が都市改革としては非常にインパクトがあると私は思っています。防災都市の観点から言つても、やはり川は重要です。例えば、東京と隅田川の運命といふのは非常に深い歴史がある。土岐さんの「堀川に川を通す」といふ構想は、よい発想だと思います。これは角倉了以まで繋がる訳ですよ。角倉了以といふ人は京都だけのことを考えている人ではないんです。浪速のことまで考えているし、富士川の治水工事もやつて、実際にベトナムに貿易船を派遣しています。京都だけのことを考えている人間ではダメなんです。この土岐構想をなんとか実現するといふことが課題の一つだと思います。御所との関係も非常に密接ですしね。

岡本太郎の太陽の塔なんてそうですけど、結局、あの万博で私なんか覚えていたのは太陽の塔だけで、パビリオンなんかはみんな忘れてしまつている。駅前に 10 分の 1 の大きさの羅生門のレプリカを建てるといふ話がありますが、安っぽい京都になってしまうかもしれない。羅生門の 10 分の 1 なんて張り子の虎になりかねない。京都はだんだんおかしくなつていく。言い出したらきりがなからこれぐらいにしておきます。

2016年9月26日 インタビュー
聞き手：田村省二，山本昌世

○山折 哲雄さま プロフィール○

1931年、父が浄土真宗の布教のために赴任していたサンフランシスコで生まれる。1937年、帰国。1943年、岩手県花巻市に疎開。東北大学文学部印度哲学科卒業。同大学院文学研究科博士課程修了。宗教学者。東北大学文学部助教授、国立歴史民俗博物館教授、国際日本文化研究センター教授、白鳳女子短期大学学長、京都造形芸術大学大学院長、国際日本文化研究センター所長などを歴任。2001年に京都新聞大賞文化学術賞、2002年に和辻哲郎文化賞（一般部門）、2003年に第54回NHK放送文化賞、2010年に南方熊楠賞、瑞宝中綬章などを受賞（章）。著書に、『法然と親鸞』『「歌」の精神史』（中公文庫）、『わたしが死について語るなら』『絆いま、生きるあなたへ』（ポプラ社）、『仏教とは何か』（中央公論社）、『神と仏』『教えること、裏切られること』（講談社）、『涙と日本人』（日本経済新聞社）、『天皇と日本人』（大和書房）、『あなたの知らない東西と臨済宗』（洋泉社）、『死の民俗学』『近代日本の宗教意識』『「教行信証」を読む』（岩波書店）、『日本の「宗教」はどこへいくのか』（角川学術出版）、『17歳からの生死感』（新潮社）、『悲しみの精神史』『山折哲雄の新・四国遍路』（PHP研究所）など多数。